

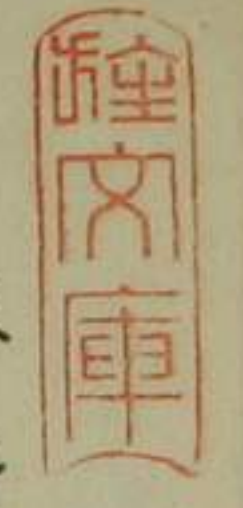


門ル品
1686
1-5

本書と故友大野誠氏（越後北蒲原郡 諏訪山村氏）の遺物として一覽の原稿也
これと井出氏の子孫に得たもの時、氏長野縣令たりて復
休来して予を校正と乞ひ次て世に公せしむると曰ふ後
幾もあらざりて病歿せ今信濃の有志相謀して吉川
書肆より刊行し世斯書あることを知らず實は氏の餘惠なる
予馬書を愛し請てこれを襲藏し以て故友の紀念と爲

明治卅年八月曝書の日記

櫻坪旗士良



水篋の科母は園を山高く級段多し
形面背面乃郡日
能日の横乃郷山間の陽に小群居して園乃形も自ら
山人の
山文字ふちも似し
新野乃毛野武苑甲斐の言程も
大野河を以て流海久河乃を和百小竹の三野
飛源故路の深
谷墻の如湮城乃と四方了うちめり
澳泮蘆葉最も
時々氷巖根を清りたき
落し
名あおなぬ地師
其辺もそはほり
か小風徳も
かうん
まを
何家師
井出乃翁を
稿鳥の
か
記
中
其
意
十
隈
川
の
流
れ
ち
り
る
意
を
記
す
る
に
付
は
聖
月
の
月
日
を
記
す
る
に
付
は
後
序
に
記
す
る
に
付
は

形人のほのびるもゆるふおん海羽のうみねをなく交級乃
さうに免るくく戸隠乃かかれらるるもあつらふ見出さ
はくしるるをまを小縣の画に寫すおき木箱乃棧ぬみす
はくしるるをまを五巻とて紙にたすまを推せん所健か
らんとするふくうん事異うんる細紙石おちたなるも志
ふふの中らふまはこの俗にせんみ都の紙をまはくしる
拾ひるん人のまふくくまをやあや難紙紙をまはくしる
まかもの産ふくくまを秋も何とてやと齊六る遺
ちくをまはくしるくぬもまはくしるたらん

九例

一世事をのれて暇あふの徳に國內の奇勝を撰るは世方に節
をひき山小清てハ山樵小石の里小入てを土人小河煙鹿泉石又道途
して目の留所をけたあき葉小寫し又其辺に車家の葉をこめて其梗
概を録し或神祠の舊寶佛觀の什賞又ハ崎人の尋常小異ち禽獸
草木の世不稀ちる古器の今やうりより雲根異物奇蹟も寫るまを
見小随小聞小何せん書ちる閑窓外遊のなとちけりも十とせ飯を
まをいけり堆をたせり竟小五卷よまをせはあり
一 圈小著ごころハ真小遠さるるを欲して親しく其物を圈して又画
家の縮寫を法としとも事を記すおいて諸家の截録を括萃し引

書管見外、但諺の口稱小随、假托の撰悞も所多し、もあは

一此書部類を分るるを一郡一部小書集し、い名あり

一名所、古款の類地名考小字、れ贅せん、中三を挙、その微言ありてなり

一堀を接する地を地理小次とて、志は四阿山を小縣、歌小三、駒岳を

伊那郡の部に出せり、如し

一十郡の順次を延喜式和名鈔等、ふか、ら、ん、先、筑、摩、郡、を、業、哉

起し、ま、て、杖、を、曳、に、志、る、ら、稿、の、脱、を、に、任、す、所、を、

一山水人物の区、この雑物小字、て、自國小奇、と、他邦小奇、あり、さ、り

一を、志、る、ら、り、間、を、へ、し、志、る、遠、東、の、豕、頭、の、白、き、を、知、る、ら、の、數、り、を、情

聞、ふ、志、る、ま、り、為、茶、あり、猶、又、國內、の、嶮、峻、あり、老、歩、乃、及、く、揮、到、と、き、ふ

あ、ぬ、逆、漏、を、多、く、へ、但、ま、ぬ、博、達、の、諸、子、に、冊、補、を、庶、幾、ある、の、こ

信濃奇區一覽卷之二目錄

筑摩郡之部

國分界

湯舟澤

野槌

木曾古道記畧

古代棧道

爪鼓山

小野瀧

寢覺林

三歸

今棧道

麝香澤

木曾踊

鞍坡瀑布

不種菜

冰湍

十一鳥

御岳

小木曾女

洗馬古物

鏡石

牛外

重玉松

筑摩御湯

蛭蛇骨

猿手狸

花菘蓉

澤村異鳥

掌蓮しやうれん

新石しんしやう

水澤

信濃奇區一覽卷之一
天保五年乃一二月
信濃の國佐久の郡白田の邊老
井出貞翁志

信濃奇區一覽卷之一

筑摩郡之部

國分界

天武天皇白鳳十三年二月三野王小錦下采女臣筑羅等を行儀國小遣
して地の形を看せしめ給ふ是地小都志末乎と日本記小足たり
國國環山漁山魏自城と成ゆ急あり山連て波濤のやく基石を敷
平坦の地ハ僅數所小過ハ毎郡あり山連て波濤のやく基石を敷
り如く乾中高きハ清嶽あり測量家の説小本朝の高山富士第一才二
木曾ハ清嶽と名其外多末次といふ山あり續日本記小大宝
二年始々開美濃國岐嶺山路又和洞六年七月美濃信濃の堺徑道
險阻あり往還艱難あり仍通告標路と名此美濃信濃の堺ハ惠たふ

獄神の神坂の險難あり今昔物語に信濃守在原陳忠といふ人任畢く
よりりた板を敷ると馬あうり深き谷小舟入るよりくさくさ然れども又
木曾の棧道の險あり蜀道の難より比して此坂よりもち不揃りしや
延喜廿御宇まきも沢路八保郡あり其後棧道の險阻を除き川
よりして新道ひけ官道改りしより伊那の神の坂ハ世々等々より
て道純木曾路ハ東山道の惣名とちあぬ木曾古道記曰木曾河より
東ハ旧より信濃ありを川より西ハ松本領堺赤川村より美濃の苗木領堺
田之の里あり兼意の路とハ美濃國惠那郡木曾の庄と記したる又万
治の記より享保八年までハ信濃國惠那郡と書しを同九年より川西と
も木曾ハ碓氷信濃國筑前郡と定したるあり天正の記より木曾二郡と云ハ川東を筑前郡川西を碓氷郡と云り 沢道の信濃の堺ハ旧より馬籠と爲し合ふあいだふあり
總て此の堺ハ何國も山川と隔てるは此の地ハ何の志もあまき所
ありを不審ありそく其辺の人より尋ねれば此地の堺ハ平日ハ分りざれ
ともあまき初雪の降るは此の地ハ方ハ降るは雪も暫も保るるを
信濃の地ハ消ん積るは體にうけ雪の消るの間を以て信美の堺
とハすなりといふ是を志すの志なり

○上信の堺碓氷嶺の冬枯の景色を以て是も同く又高井郡三國峯
と云ハ上野越後信濃の三玉の堺あり嶺より南ハ上野北ハ越後と
別れとも西ハ山嶺あり信濃とも同くハ信濃の地ハ雪管を以てり
て上越の地も雪管を以て堺を以てり信中の高山
すべく雪多し万葉集ハ水管并信濃と稱し雪多し冠
せしなりハ水管ハ又安曇郡と越後の頸城郡との堺地白池といふ

池あり此池羊を分て小い者く南ハ白く其青き方を越後の地と
し白き方を信濃の地とす越後よても白池とすし其下ハ白池
村といふ里あり
其田の塚の木ハ七年ハ一度下旅訪より神官行て
あき湯を弁こし塚の志しとをいふは昔より例也

湯舟澤

伊勢の志木ハ此所より出る
又紀州大杉山より出る

馬箒より谷合の釜橋の水東北一里餘ハ湯舟澤と云里あり此地ハ
兼好法師の住庵の地あり其頃ハ兼好居士と号しんをいふ訛て
猿猴居士と稱を今又訛て猿居士と号しんをいふ訛て
酒を携りて兼好の灵を祀る茲ハ經塚とて六尺許ハ之を祀る
其塚の崩より所より小石ハ經字の一字二字書くも出たり其側ハ近
以兼好塚の碑石を立又茶臼一ツ
出たりと云

吉野拾遺云我一とせ本方の坂のありささくはけりしとき
山のふすまし河のきよなりふくまんとすりけりしは
ありしとありぬへき一所ハ志を付れとて

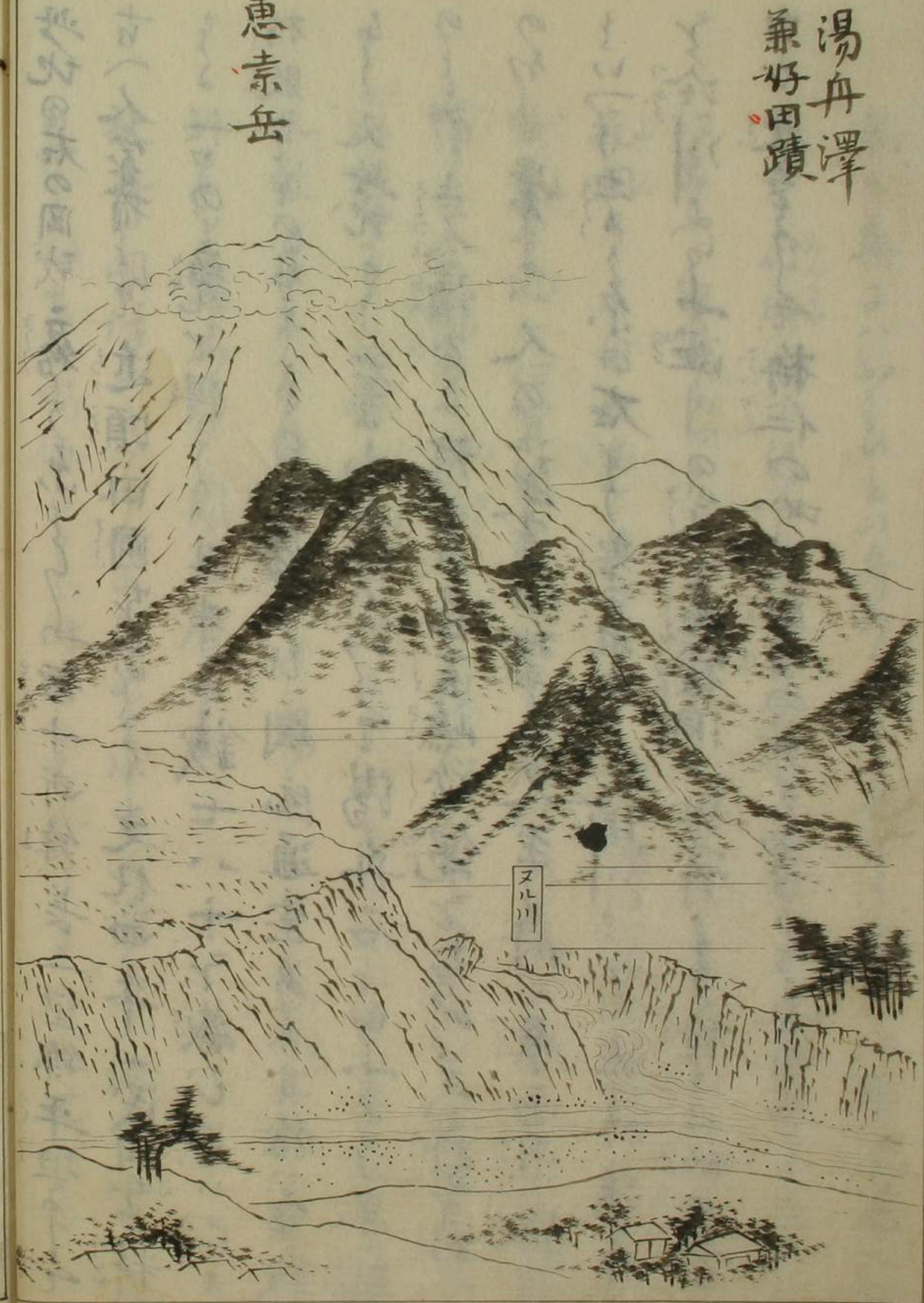
出ひし本方のありし志を付れとて
とありて唐ひき結しと志を付れとて志の志の志を付れとて
人具しとありし志を付れとて志を付れとて志を付れとて
しんも又とありし志を付れとて志を付れとて志を付れとて
とありし志を付れとて志を付れとて志を付れとて志を付れとて
出ひしとありし志を付れとて志を付れとて志を付れとて志を付れとて
只初奇をこしありし志を付れとて志を付れとて志を付れとて志を付れとて
ありし志を付れとて志を付れとて志を付れとて志を付れとて志を付れとて

崑山集よハおれし之の奇ありてこれより伊賀伊勢尾張大和
あつて行跡してはよハ津のむ天王寺のあり安部郡と云所の
相島ふりてやふらむに王家を折るありてなれりて
寂閑よりハ命相丸を具してて 周大曆よハ竜命丸と有
紙寫の地ハ伊賀國阿部郡多尾村周見山の棟よを乾坤
端と云元禄中碑石を三親元元年二月十日卒成忠より
江進のより 二條良基公潜よ下向ありて 宿をとらむ
米穀五十石を自二十廿成賜用分寺よ葬られサる傍
おをを物つて 周大曆よ在
秋斎湖修よあや山の奇を成たて詩よて証と記せし
あやうと左巻馬作より 時京よよとて 行状記よあり

此地の右の岡成務より左より徑十町餘長一里餘平坦ありて
古く人家有りと近頃田圃をひく文化四年一民田を耕
てよハ一つの産を得て 其中よ錢七八十を藏む半ハ己よ
朽敗をそのなむとよの五津なび洞元通室あり其餘ハ宋錢
あり又花より右よ山ふかくして湯舟石よりあり早魃
のよハ土人清るよ行このよと嶮峻繩をたけよと折る移る
のあり常よハ人の行事を禁ん人至る村ハ暴雨烈風起る
といつておろく京の右よりなれ出を温川より左より流る
や冷川より温川の岸の地抜洞より所より柱の形の石あり
白く灰をよと梅仁の如く紅豆の如くありて多し

湯舟澤
兼好田蹟

惠宗岳

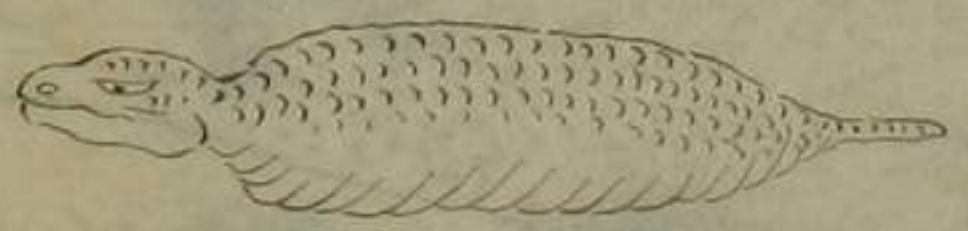


蹤荒^テ 舊苑無人
掃霜葉亂飛埋
古道^ヲ 十載獨留^テ
山月光^ヲ 高才誰^カ
繼^リ 徒然^ナ 村
山邨良田

あきし
 なく鳥神山の境さやう
 ばすくしむさるも

三留野の沢の林系より竹の代竹つくもて、要好自
 筆の徒然と一匠書より奇書古奇の筆は
 いまも世にありしつし、其の自筆世に稀なり
 つま、其より三行をこよ幕写す

野槌 漢名十歳腹



馬籠より妻籠の間に一石峠とて、其の山あり、此山中に形槌と云
 物あり、八月の辰たましく出るといふも、稀なり、其の形蛇の
 如く中太らうして大小あり、大なるは長一尺三寸を、二尺廻り行るも
 蛇のごとく、垣切を横きり、其の形は、行事形に教て害をな
 すと云ふなり、和漢三才圖會に吉野の桑にけあ、そのを記し
 此説は異なり

木曾古道記畧

○馬籠妻籠三富野迄、今道も同一三富野古、御殿初て木乃為
 洞より、此所は官舎を立、國司官史の休息所と云れ、故よ、御殿と云
 ○幸神の森、右道是より、良方一行、○與川村
 此所往古より、月と名所と云
 山遠く、その言、谷中此
 所の如き、ありん、実よ
 月の景地なり

乃れれ亦く住を好まざる所の与川の月のふるめあり 侍人少

○福柄峠農家三軒 ○千若二軒 農家 昔幾年よあれどもきれぬ箱魚を

ゆて業とせりいづり若れハ千若と異名せり是も依て之所を千若

と云 今訛てシヤ アカト云 ○賣魚 農家 古道の村茶店ゆて奥をうり

業とせり 今訛てウリ ○菅蒲平 古道の見通あり ○長野 須原の

○八幡之木曾殿勅請と云 義仲の子孫代々木曾殿と稱せり其時代

○屋高屋形の此地木曾殿館の古跡 木戸口馬屋 八子上倉倉 的場

○猪子村の興二軒 享保の初浅蘆を掘出り四十貫二百文あり 天徳 其外

二十余品 ○殿村 大川の西此所谷中第一の日向紐温暖めて膏腹の

地あり 街道へハ川を隔て要害終れハ義仲の滅瀧昆衣商此所

舊居あり 故ハ殿畑殿田殿栗寺の地法所と持り 根井樋口

今井池口竹腰其外名士の子孫 伊とて姓を所の名ふりし侍

たり 上村 殿村の上とて名士の 関山屋形の跡より坤方あり 東ハ嶮山西ハ

害の地之今たて 伊奈川 伊奈郡堺より流出 岩子観音 古川の

古道筋ハ非ハ羅天とも云 正徳年中洪水水て易地 定勝寺 木曾右京大夫家豊親豊

共所下ニ 須原 古町と云ハ河系あり 鐘銘ニ云 位臣木曾莊 淨戒山定勝禪寺

つゝ洪水小 鐘銘ニ云 天文十八年己酉霜月十七日大檀越源朝臣義在

射午の弥陀堂 毎年春分より十五歳以下の児童集りあり

小弓をひく 弥陀の木像に射。此木像旧五休あり 毎

持遊ふゆふ小豆巨離と云 旃全加ハ平日ハ抗の上ふを

童等縄小結り 樹と云つゝ ちとてさま 戯弄を

て木仏の操舞り 云ありとせり 此日 醜を造りて児童

を款接 毘毘沢 古道 昔育人通り 村毘毘をとり

いづれ
古代
棧道

類題

道梁

赤らき

ふも

小川

とら

霧ふち

みのみ

源頼真

新後拾遺

宝く

とら

たのふ

山



山を好む山といひ谷を
好むは只と云け谷川の末
今道の立所にあつる。

おろしなるぬらりふ死しりとも名つくと云 池尻家二軒あり

糸セ山井池より其標あれハかりあり 今道より古尾ハ山の方よりあり

より今道一里ほどと云く立所よりハ所の入口は橋あり

此所より谷川をたつていひくせと十所をうへ古道ハ山路ハ

嶮なるなり此より木曾洞道始の棧道あり寛文の頃ハ

谷の両崖ハ湊連なりて是より土人取て斧湊を打セ

られハも是より佛堂を橋神の堂ありと云て後ハ

と云 貞治二年 荻原の村長幸と云ふは谷より是より棧道

南三ノ間ハりて奥より此の岩嶮なるなり又家分より

又家分より此の所を此の山より出るは箱人家の海と云

きやあり

續古今 吹あらし岐より少坂の谷風を指もきぬ花をりり

神の少坂ハ湯舟沢より園系(教)嶮を云ふは木曾此

棧道の幽遠深きなり但棧道の坂をハ修築

書事近年の例なり

○東野家十軒 太古官舎の有る所と云大度の社あり中古西久保左近

と云者住りり木曾二百騎の内五十三人の侍大将の内之孫陀堂あり

中ノ古業の画像三幅あり藤原行重と云人建と云是より

山の半後を廻りて凡越山あり。凡越山 滑川の事なり今道

痛みの初より翌日より山に土人凡越山と云前ハ船

伏山有船を伏し山陰に古尾なる古所の里へ下り

凡越山より滑り秋の初より木曾の歴 先 定

凡我の峯と云ふれは木更谷川波もひらくようの橋の多 長明
凡我此峯よりおとす所乃をく木更谷此處まゝより
按ふ凡我の名所にもあり飯田の西白山寺凡我山と号す田原
の北より凡我を通りあり又松本の小乱橋（出所）又凡我峯と
云ありされども此の古歌みおろせん

小野瀧 今道

細川幽斎の記も木更谷の少野の瀧といふは布引箕屋よりあり
ききくおろくやいさこれ程のり此國の秋枕よりい
〜〜〜ぬやと云ふは古道ありされはあり
今凡天文年中多在福島一館をりされ〜〜〜
たふれはさふあ人もき〜〜〜

両寅紀行

小野の瀧といふあり〜〜〜
さふよりおろく〜〜〜一筋あり

はみ市ふる少野の名志しれ瀧ありやいさ〜〜中より
馬丸 光榮郷

寢覚林 今道

臨川寺の庭よりふありを木曾川の行して兩岸とも小屏風なり
た〜〜〜漲る水の瀧あり〜〜〜
岩の徑十間長さ四十間ありの許多の岩石ふ〜〜の形も似
〜〜〜名つく俗は浦島古流と云ふ三飯翁といふ者け所魚を
〜〜〜浦島太郎と緯名丹後国水江の浦島〜〜を附
今〜〜詩奇の誌〜〜

兩寅紀行

臨川寺といふあり庭よりふあり〜〜谷のり〜〜

もむたらしきものやまよふまよふなるみあやまきものやう世倍る
の在歴をいへども位利をりよるんまふたけいよまきものあや
たひ枕かき寝のりも赤の差れ証まかす。わねのき 馬丸 先業郷

みうり 三歸 寢覺のつまき

三返廻翁閑居の地人弘治の改世のうまひすまきを厭ひけ所は住
て暇あらしむに山中奥深く入と茶を枕を寝て人よ与ふ

そこの名臥あらし良方の書九部あり東北の山陰の翁の松 花雲寢覺の
漁抄は作る
ハク人之ト云

按雍州府志寛正年中武藏國河越有道導諱三喜者自号範

翁又稱支山人及中年入大明留居十二年学東坦丹溪之術遂携

方書歸本朝救療蒼生 これよりして見れハ三歸ハ三喜翁可

あらしむ

ホるとりあををり程よ寂しけさる家つツやのありりをも
あらしむををり程よ寂しけさる家つツやのありりをも
あらしむををり程よ寂しけさる家つツやのありりをも
あらしむををり程よ寂しけさる家つツやのありりをも
あらしむををり程よ寂しけさる家つツやのありりをも

隈あらしむをり程よ寂しけさる家つツやのありりをも 蒲生氏郷

今の棧道 福島土松のる

慶安元年尾州敬君より有司は命しき棧道は石を疊長さ五
十六間横幅三間四尺以前ハ丸木を柱として大木を添し横
小幅度き極をまて不平の所ハ土を並く土橋とせり又寛保
元年重て有司は命有て左右より石疊しき土を並度垣
の地とせり

寢覺床



近衛拱政 家熙公
 谷川此まにを
 羨も強し
 福見の床と
 名つ
 らん



南化和尚洛東祥雲寺
 洞山慶長中寂
 路歷蜀難遊石梁傳聞此景達君王
 嶺上風冷溪流漲遙怪何人寢覺牀
 清流一帶不崖中如象如觀
 災鏡工日為靈風捲波死人
 云潭底有珍玉

蓮門由記

小野の湫



木曾のくけりしりふも西蜀の棧道よけまゝさやふ小津ありし
 をけりしとせかきせ先よ石を木にくくみあけしりしは里の子の孫
 りしけよるあゝさよえてまの橋を築してこゝまゝしりしと云

おしんきや年月名の三すもも木乃けけりしりしと云えんは光榮郷
 あやうな名のと流して今更よ流したあき木乃けけりしりしと云
 たひりきや代よあきあきあき昔流の木乃の金橋 香川黄中

○吉野 古道厄哉の 禁寝堂の東 ○徳原 駒ヶ岳の禁まて 廣坦の野原 其中よ古の驛高札場寺の名
 むく地の光系久しかめえん今道とちり上松の駅引移る

とらふ山を越滑川を流して此古町との間五輪石塔古墳等有
 西下りて村在比村雑を飼へ一夜の内よ失を因と鶏を飼へり
 ○萩の系芦湯 ○大切坂 多々 ○川上 ハ沢川の上 ○伽藍堂 寺地の比古道の時寺あり

○湯澤 水無流大納云殿ヶ所 ○大原 茲こゝ麋香沢みけぞうと云所あり此猫の

を遊去る」と云 麋み香け沢ぞうと云所あり其跡日教摩く 山やまのしりれハハ麋み香け沢ぞうと云所あり

麋香沢と云所ありや按おみ麋み香け沢ぞうハハ麋み香け沢ぞうと云所あり此獸猫

のわわと云所あり本州より 靈猫れいみょうと云所あり倍 麋香猫みけぞうと云所あり麋香

文化十年奥州岩手山此物正出々香氣竹木よりつゞき 異あり四六日失さる」と云

○原野 大原より 是より今道は同く 主簿しゅぼ一いち次じ行ぎょう此こゝ地ち南なん西せい上じやう田でんと

云あり今道之こゝ所は古道こくどうより 西にし上じやう山さん陰かげあり西大だい川せん北きた上じやう

田でん川せん東とう山さんより要害がい社しゃ幽ゆう洞どうのち地ちなり坤ハハ福ふく島しまよりき邑むら里ら廣ひろく

街まち乃のハハ兼かね遠と義ぎ仲ちゆうを強く養育よくし子息こゝろ并なら郎らう寺じ

と附置つけ給たま仕しさせりあり此こゝ地ちハハ義ぎ仲ちゆうのえ服ふく也なり云あり中ちゆう三さん岳たけ遠とく尾

ありけ辺への田畑はたけの名を流居る名なり云あり所は手て塚づか太たい郎らう光みつ遠とく尾

ハ村むら又また樋ひ口くち次じ郎らう野の上じやう上じやう推お六む郎らう根ね井い小こ根ね井い太たい屋や鋪ぽ之し洗せんるの西せいハ

今いま井いと云所はありて兼かね平へい古こ江えと云 木曾長政も今井と云所あり兼平

○若宮八幡館やわのみや館くわんより翼方はつ義ぎ仲ちゆう幼お清せい森もりの内うちハハ巴は女にょ磐いあり

○巴は川せん納な館くわんの下大だい川せんあり右の方納な涼りやうのと記き泳えい遊ゆう也なり所は故こゝ名なりあり

○桃もも谷や巴は女にょ枕まくらの突を敘り投り不と一谷や桃もも樹じゆあり朝日あさひ山さん上じやう

○菽しやく原げん 天文てんぶん世せい四し年ねん武ぶ田でん先せん勢せいキ入て木乃の美み昌しやう押おしの岩の流たり

○鳥とり井い嶺りやうハハ御おん岳たけ控かき現げんの邊お場 サ彦名命里 ○矢や立た水みづ 峠とのの峯 治ち永えい四し年

頼たの朝あさ石いし橋はし山さん合あ戦せん援えん兵へいして義仲ちゆう進しん登とうの村侍し臣しん大だい丈ぢやう坊ぼう覺かく明めい願げん書しよを

流ながる山岳たけ奉ほう納なつの硯水みづあり平澤さわ諫せん方ほう明めい神しん天文てんぶん二に十じゆ年ねん三さん月げつ十じゆ八ぱち日にち

武ぶ田でん暗あん信しん木き曾そう討たう入にの村義ぎ康かう鳥とり井い峠とのハハ出で向むかて防戢かきの常暗あん信しん此こゝ森もりを

本ほん陣ぢんとす ○贄ひ川せん 中ちゆう古こま一官くわん祓はら方ほうの神事じ小せう楚そ割わりの鱈と供

りるより西の名とよれり鱈今稀よ上れり秋あふ美味あふんは地核
沢と木曾より 木曾家館 屋形を託て 義仲宮腰の館没後其
子朝日二郎義重同三郎義基同四郎義宗三子彼方方に蟄居を
鎌倉頼嗣將軍の代義仲の曾孫源太郎基家始て仕上野國
子村の莊相模國名香の莊を賜ふ元弘三年基家嫡孫又太郎家村
足利尊氏に属し六波羅合戦に切あり曆應元年潰はちよ奉陣の
外十三箇所の地を賜ふ其節缺ハ須永より天文七年より同十四年
迄の間よ今の街道を削きて福原大川の東今大通寺の所よ新館を
造り復原より引移り義仲十九代美在の廿二
天文十四年より天保
二年迄二百九十年 和洞の
以下り天文年中迄の古道ハ外よあることを知り者今の街道を以て
古よあつたゆへよ少し遠へる事多し今の棧道ハ古寄の峯と棧と永系

いふに此館も今ハ道筋よあり 出奔の小形の跡を以てこよふに乃
奇枕有りいふゆへに
あはけい急なり 天文二十四年四月信玄討入の舟館を自壊して
王流上流に移り同年八月美原福島の要害小拠 今山村氏
第宅の上
美昌ハハ沢の地小籠る 大川の東福島の南
み古流あり 老臣の諫ふより信玄と和
睦同土月 十月弘
治改元 美原美昌甲府一行此時家臣小討て曰く甲州よて我ホ
父子相縛せられ先んずく討つハ先我志を射て合戦をへし討
我ホ小討を引引たり者ハ勘當ありとて老人病老か具して行
不日よしてゆへは信玄此事をや大に感せしとあり秀吉は
山代よ移り美昌諒のよ小封を下統小移られ美原もあく疾を
得て卒んその子美利の代小いりて罷あり國威陰々の上
古道記の大意

木曾踊

木曾踊ハ六月十三日十三日足沢の参の秋又七月于南盆踊を大踊

と云 盆中ハ村、大道小男女共交りて車輪の如く若きものも更なり

老人ハ杖を傍小更く交り老漢ハ棒を負兒童をひき連れあり

中夜一夜踊ありて 平日ハ移徳誓願の祝ひ又ハ佛事供答の當村日

ち相争てうらやみのたより 街道をき村里ハ曲節交りて古風も遠く

風俗間もいとも末川西野をいづ山里ハ古風を失をんを振ん屈曲

せん只古の俵を仕づく甚古雅ありて 節もせも志づやうして

踊の類ハあゝん其名目 「おやま」「おろ」「おん」「おん」

此名目初小沢ハ唱奇ツツしてわいをせみふ遠く是踊のやうも皆遠く

ニツを記も花菱の奇小ハめくつくのソハ和さまを第一とす

此代ハめてふおもくわあふ末ハハ露露籠ごよの松。これのお家ハめて

おんハいもいもせぬうののさう。急びす大くあふりてあそふ

こいぬハなまきんせふよとらう。さんびやう。いもいもをどれよ

いもいもハいもいもをたけ。いもいもをどれよあそふあそふ

いもいもハいもいもをたけ。いもいもをどれよあそふあそふ

いもいもハいもいもをたけ。いもいもをどれよあそふあそふ

いもいもハいもいもをたけ。いもいもをどれよあそふあそふ

いもいもハいもいもをたけ。いもいもをどれよあそふあそふ

いもいもハいもいもをたけ。いもいもをどれよあそふあそふ



木曾踊のこと

踊ふもれりつこの玉ももろりと六寸付れとけ山里よ木曾踊の
名つこの民より出まふらんされとあゝ都のをとうちまひひてこ
やひふあれもいそん万葉集小奥十山と後せ山よつく山嶽山
の麓西野末川とけ山里回ふと古よりその名よ木曾踊の名ハ志レ九
たり七とち八十の祖父波より娘も孫もうち交うそいひつゝ扇もて
立舞ひりさる今めりかゝぬ振あて唄もあつて世遠くして三ッ四ッ
あつり一々のを彼地の若も老もも家屋小いころより来り
りしをまめく踊せん侍系耻しとも何ともいひし人志づやに
うの松小津海ふあんさしものよふれり姑かゝんあつたよな
うれお山里のちまひあつていもよりあめ事あつたまひ

山里の人々の神ふおまそなやめいなき山小空をとらあつふ
とそおあしその民隣里ふもかきれうはせえつこいも迎あは
何もまきこも多くんぐしのつまきあつた本つ家をもつて住居する
ものもあつた一の家小安めをも老の後とすまゐぬまゝ一はよ
むつまゝ境を越ぬのをちうて海ふあつた神の世の人とつむ
いあつらんそれらう踊ふ付きハ先ハこれも神踊のたぐひも
木曾の山里ハ婚姻の酒宴も古風の筑あて強ハうららん
哥をうらふ沢路の辺ハ強をうらとも新あゝ食く世舞の如く順礼の唄
のどし山中の女ハ強を眉を刺し鏡若をつちん但嫁入の村をうら強を
漆りあもあつた春ハ志南ハ強の糸を鏡ハ志柳のけねく負あきもみ
しうし廿年茶までハ西野末川の辺ハ花の五寸をうらある梅枝の木一本

を濡そびたり近所の文松も小布麻又はいらと云おを濡そびて月よけに
 といふお山中ふすしてかしく尖あり八月秋分の後二七日をこて折てはを
 剥きふうそ織なり秋分のお小採とき山神の崇ありこ云傳へてこいん
 山小入小畏衣ををを織ちりこ雪をうむと云おををくけお小
 かしんと名づく老婆の毛をを兒とる男かかぬ婆たるを

又 蓴 麻
 和名 イラ

花 終 紅
 紫色

玉篇云音何
 和名 伊良
 小草生刺也



西野末川辺正月の幸礼小先村長の家小入りゆゑるれといはまにこられ
 りふは正月のこの月之錢九文ツコいこておも基子類を蕎麦を
 ニ三丁に角に切汁小煮て口祝うと腸を出も雑煮の玄あふ一丈より
 牛族をへ行ハ内小ねを立直礼者これ紙二枚で端を切て結付
 毛を八ぢちをさすといふ平日朝飯をあそと云夕飯を夕あし
 いふ五合餅ををこ其申をせんといふと云あといふあり言あや

鞍坡瀑布

王泚村の内泚部といふ里に大泚あり木房中の諸瀑小冠り是小仍て王泚の
 名ありと云主人祀ては不ともおんけと云地行路の経所ありさるる人多く
 滝す瀑布ハ懸崖の下にあつて其勢奔る如く水石お激し
 殆山壺を撼も有司の伐木て下も木流れて泚壺小房煙州一管を吹頂不

以流^ニ出^ル此^ニ由^テ觀^レハ千^ノ深^キと知^ル一^ノ然^レ九^ノ瀑布^ノ奇^ニ絶^ト鞍^ノ坡^ノ小^ノ志^ノ久^シ
 是^レ行^ル路^ノ小^ノ水^ノ王^ノ湫^ノ不^レ至^ル以^テ筋^ノ崩^レ鉄^ノ村^ノ西^ノ小^ノあり^テ南^ノ岸^ノハ瀟^々立^テ石^ノ相^ノ
 擁^リて景^ヲ望^ム地^ヲ一^ノ但^シ怪^ク岩^ノ奇^ニ招^クの義^ヲを^レ入^ルの北^ノ岸^ノも所^ノ大^ノ澗^ヲを隔^テ
 灌木^ヲ芟^リ蔚^シて僅^ク其^ノ首^ヲを^レ入^ルて灌木^ヲを穿^テち^テ下^リ漸^ク其^ノ全^ノ形^ヲを^レ入^ル
 対^シハ湫^ノ頂^ノより岐^トあり^テ又^シ列^ス岩^トあり^テ羊^ノ腰^ノ合^シて又^シ三^トあり^テ地^ノ小^シハ
 中^ノ間^ノ奇^ニ石^ノ秀^クるもの数^ノ不^レ奇^ニ偉^クあり^テ究^ク陳^ヘる此地^ノ險^ニ隘^ト親^シ地^ノ
 不^レ至^ルて主^ノ秘^ヲを^レ究^クとあり^テ徒^ラ仙^ノ骨^ヲを^レ恨^ムとす此^ノ豈^ニ小^ノ野^ノノ瀑^ノ布^ニ此^レ
 放^テて望^ムも^レさるるんや但^シ名^ノの埋^レて稱^セれ^ルを慨^シ嘆^スるもの
 云^フ鞍^ノ坡^ノ則^シ葆^ノ光^ノ君^ノ子^ノ人^ノ之^レ不^レ稱^シ之^レ
 不^レ亦^レ宜^シ乎^ニ
 冰^ノ湫^ノ福^ノ島^ノより六^ノ里^ノ程^ノ有^テ王^ノ湫^ノより湫^ノ越^シあり^テ間^ノあり^テ此^ノ道^ノ甚^ク峻^ク峻^クなり
 獲^ノ門^ノ山^ノ卯^ノ刺^ノ
 史^ノ王^ノ湫^ノ記^ノ行^ノ

冰湫



鞍坡滝

百回許

牛馬ウマハズ石壁セキヘキの地チ小當コトウりて行くイ乃ナ有ア山ヤマを取トルて詰曲ツグマて上ウ
る山ヤマ甚シ、截セツ薛梯セツダを設セツ勝シヨウを攀ハンてとるト乃ナ一処イツトコロ既シ小石壁コセキヘキのよふ
抵ツクて俯視フシるルこき、削セウ立リツ干カン仞ヘン密樹ミツジュの間ノ途ミチ小潭水コタンスイ一帯イツタイをスる其色シキ涼スズシ
碧ヘキよりシ青霄アヲを望ノゾみコト既シて巡メグりて下スる歩フ小随コズイて漂水ヒョウスイ激シ
あハちる、忽トウ一條イツジョウの長橋チヤウシヨウ溪河シヨウカ跨カるカる潭水タンスイ小映コエイしシ白虹ハクコウの空中クウチュウ小
起キるコトこれ氷ヒ々ツツ湍テンの橋シヨウあり、空カラあり、路チ愈ユり愈ユ峻ツルい
ま、橋シヨウ不フ至シすシて巖イワン徑キョウ断タン又マタ梯シを踏フて下スる碧潭ヘキタンより足タラシ下ス
あり足タラシ是コトるル乃ナ小戰コセンく撓カつカつカ乃ナ巖腹イワンブツ横ヨコ小版コバンを施セしシ閣カクをつツく
乃ナの二丈ニジョウ左サ小轉コテンしシ橋シヨウ不フ上シる空カラあり、南岸ナンガンを望ノゾめ、巨巖キョウガン秀立シュウリツ
主頂シュウテイ怒起ニコキしシて天テンを突ツくコト松栿マツキ屈曲クツクツしシ巖イワン勢セイを助タて
乃ナの乃ナ布フをス巖腰イワンウサ凹ウツちる所トコロ小橋コシヨウを架カすカ橋シヨウ巨木キョウボク二本ニポン架カしシて
橋シヨウを敷シ亭テイ小欄コラン干カンを施セしシ雅素ヤソあり、俗ソクあり、橋シヨウを滑スりス路チの
有ア一イツ小祠コシラあり、標ヒラカしシ、弁財天ヘンサイテンといふ岸キの傍ナリ白沙ハクシャの堆ツマき所トコロあり
て橋シヨウを望ノゾめ、峭壁セウヘキ割道カクダウ一瞰イツカン目メあり、嘗シヤウて尾陽ビヨウの君山キミヤマ撰センしシ
所トコロの岐岨キソ志シ其勝シヨウ岐岨キソ小冠コクワンたるを記キしシ乃ナ山窮谷サンキョウコクの中ナカ小
在ア樵者シヤウジャ渎ツク夫フ時トキ一イツしシ乃ナ此コノを過スるコト亦モ惜オシくシ也ヤ

氷湍こりりかせ

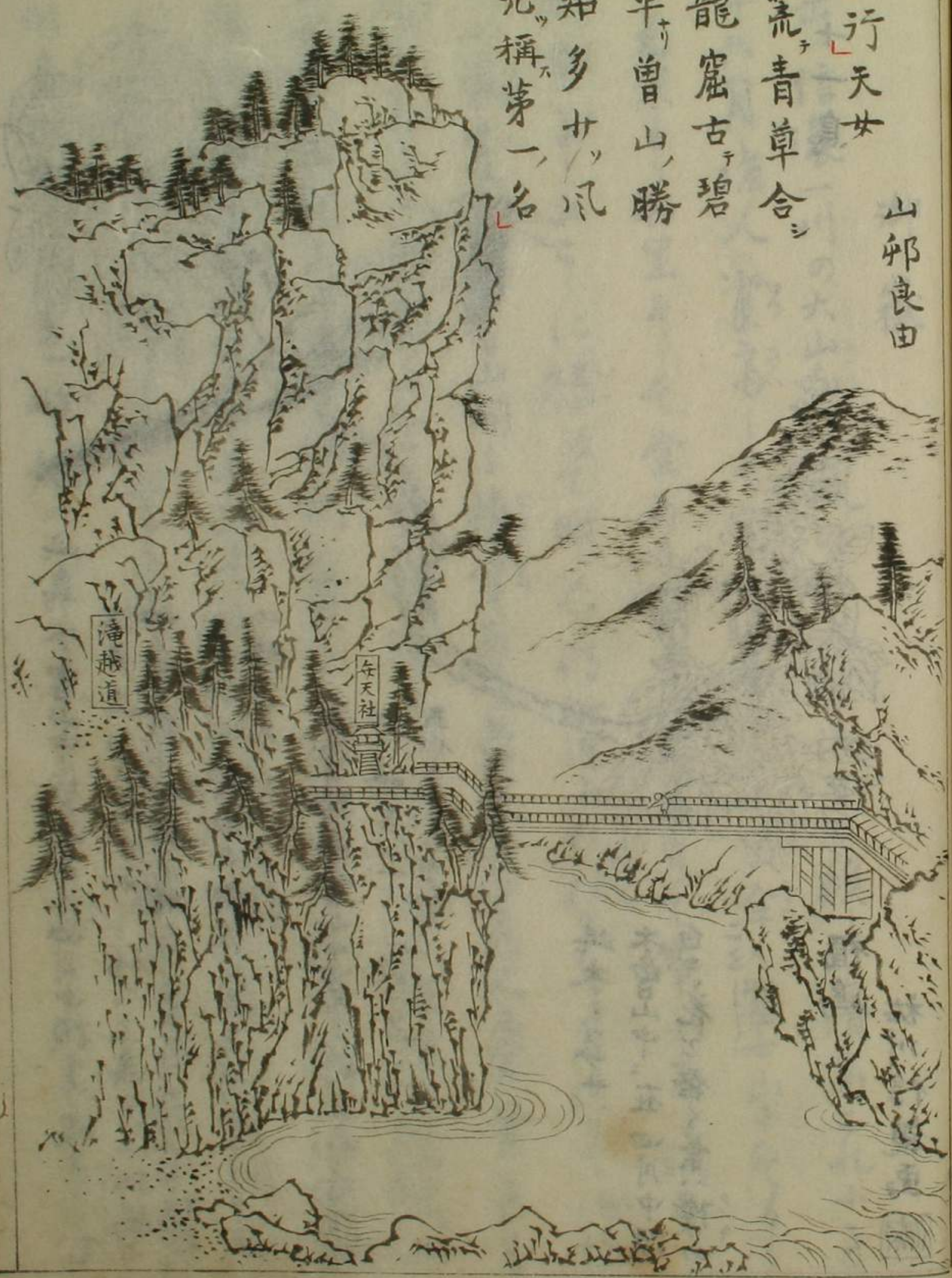
路盡懸
崖老樹
橫陌危斯
處使人驚
長梯倒踏
崦嵫下獨
木直凌雲



霧行天女

山邨良由

廟荒青草合
驪龍窟古碧
潭平曾山勝
榮知多廿凡
景先稱第一名





此鳥木曾山中に孔あり四月中頃鳴る

其声十二々々こぶる如く依て土鳥と云杜鵑の如く故小杜鵑の雌も鳴るも此鳥も杜鵑前の坊後の趾諸鳥と異れはたゞきんの鳩小あり

木曾路園會小十一鳥と訓して形略也の如く啼声十二と云故三名とすこをハあやまるやあり

此木ミツブサ
木曾山中に在四月中頃
白き花を帯く葉ハ樸の
こも

福嶋

祐川信親画



御嶽

御岳ハ信濃一州の大山あり嶽の形大抵浅間小類して清高これ小る
毎年六月諸人潔斎して坐る福嶋より十里全く富士山小外なり
如く尾沢より四里あり堂あり秋中炬を照して峯小三祠あり
金剛童子と云うに想ひて明を待此辺五粒松多し名は是を御松
といふ盛夏といふとも山間小積雪あり草木生せん又三里登き色を
絶頂よむる二祠あり一を五の権現といひ一を日の権現といふ其西
北の峯小三祠あり一を俱利伽藍といひ一を八王子といひ一を土祖
権現といふ于東の峯小三池あり一川の池ハ水洞と云一川の池ハ水
か一川の池ハ水満と云西形小流る其心を地獄谷といふ山上小多あり
り形鬼の如く毛色雌雉のこも人をうそも物も又山上小一

草を生ひ葉胡蘿蔔小似り小花咲て莖の如く色紅紫あり名
 けり約草より又一草有り蓼小似く大有り葉軟や里人
 掃く喰ふこまら成此草より

里祠を黒澤小河り延長三年鎮座至徳二年木曾伊豫守家信造営
 古若玄天文廿三年木曾左馬頭茂康造営あり木曾長政永祿三年由
 岳中堂る木牌小姓名を深き木曾義昌歌仙の画板三十六枚を以て今其四枚失

画板裏

紀世乞

永祿八年十月朔日願主源朝臣長政

例祭六月十二日三日流鎗馬三騎あり神主武居氏
 画板彩色摩滅して下繪の墨の跡の三
 跡る每板裏小哥人の姓名を志す紀世
 乞と稱しり板小年号願主の姓名あり

木牌表

志解
 仰岳の精を尚郷百日
 志御信教如鏡
 長く是の如く一尊
 于時永祿三年秋林鐘三日
 源朝臣木曾長政

同裏

伴人数
 上松長十郎 原新三郎
 上村虎之助 源力
 原太亮 源三郎
 白村幸七 源辰
 原太亮 源辰
 白田三郎 馬飼
 白田三郎 源辰
 白田三郎 源辰

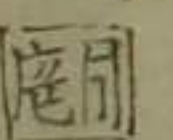
小木曾女

葦原の西沢 方言謂 湖為沢
 内小 大下窪田 追平 此れ山を廻りて小木曾の五月日小川
 續日本紀小岐蘗代実録又吉蘗小吉蘗今又荻曾此谷三四里
 の間小 蒲の原 五月日 塩沢 寺平 細谷

ちといつた村あり、男ハ耕こま一き樵き女ハ麻布を織おる業わざト又年
 もき女子等ハ木絨とんぐ志家の皮ナリト背負せおひ蔭糸やせいとありト出いる妻つまおん
 これを小木曾女ト云 平沢のせきやま巢山月庭づらていの状さまを画えく自みづかみ讃さんを其詞ことば小曰
 都みやこちちく住すまふの言こと多おほ女むすめハ此この由よしひまひるとりありト小木曾
 語ことばハ赤山あかやまのうばやつしひしゆゆ付つれれハああのの北きたつつららととももととれれ一
 もゆゆ一いふふひひとと昔むかしより小木曾こぎぞう草くさららしし緋ひのの名なよよああよ
 麻衣あさぎぬききりり木絨とんぐややれれのの背せ負おひつつ日ひ毎まい品しん一いととひひららいいく
 さゆゆののああれれととううたたううののううこころろささひひととこころろささひひののららハハああいい一
 めめらられれててああままのの一いつつひひととままととここししととももああつついいまま
 おおぢぢちちれれくくううららるるゆゆままるるののああれれととああつつおおつつががよよううとと
 ここううふふゆゆららぬぬ都みやこちち出い入いり大おほ島しま女むすめのの今いまああかかららいいととふふししとといい

義よし勇ゆう女むすめ此この日ひ亦またああままつつ別わかれれこ
 そのその衣いひひととここととささみみののややんんも
 なくなく天あまつつちちののああののるるふふくく
 ままれれちちををらられれたたわわららううままん
 かかここををららややままれれたたううののいいををままん
 ねねととかかううななりりききととふふううむむつつひ
 印いんををななししてて他たををううままんん志しののええんんをを
 いいまますす一いつつひひももああままハハ此この日ひののああいいまま
 ののああいいままののああいいままののああいいままののああいいまま
 衣いををらられれたたららハハ人ひとののああいいままののああいいまま
 せせいいののああいいままののああいいままののああいいままののああいいまま
 んんああままののああいいままののああいいままののああいいままののああいいまま
 一いつつひひももああままハハ此この日ひののああいいまま



永清


不種菜

麻衣ハ木曾の名小おひて 奥山ハ田舎にもに常と云ん故小麻をつく
 木乃ハ麻のり出りる名也今も里沼ハ麻の皮剥はくを木と云 茲ハ王沢村角小
 二子持つと里ありけ地ハ麻をつく烟たハ子翌年必菜を生ん芒菜わを名の
 芒わより小種ねを撒まき水み自然じ然じ不生しずし叶所かのこ湯ゆて他た小こをこ之し先さ又また二に身み之
 土人弘法こうぼう菜さいと稱なん 晴は珠たま云い所の嘉か話わ録の
 諸葛菜しよこくさいの類るいハありん

洗馬古抄

洗馬せんばの驛志村氏の所蔵しよざう小古物こぶつあり 沢の東山上とうざう小古壺ここあり 傍かたわら小倉澤こくらざうと云い下したあり
 安永九年あんえい開墾かいこんして新田しんでんとも寛政五年かんせい墾くわんちりより一邱いせうを穿うて壺つか二に古刀こたを獲えた
 り壺つかの中なか小鏡こきやう二に鍬くわ六むツ有鏡あきの面おもて光あ失しん背せい文ぶん竹たけ花はな戲あそ鳥とりを湯ゆにく色いろ愛あいをい一い派は小こ腐ふ
 爛らん今いま魚い尾び様やう本ほんをもたもたもたも刀たもも刀た爛らん僅わずか小旧状せうじやうをもたもたも形かたち常じょうの制せいありん

古鏡全圖



古刀



惣長二尺八寸

此処スカシ

スカシ

按本邦刀劔考ニ古カ三品ヲ出ル中に江州竹生嶋の宝物の古刀長三尺二寸
 及有柄をうりあるすう等古カと同國之但澤の形此の之其文曰
 此古刀其制簡古蓋神物矣為國史所謂頭槌劔者或以為武
 内宿禰所佩者未明其徵云此古刀柄所彫透シタル穴アリ其時代ハ
 不可知竹生島物歟今云毛抜形ニ髣髴タリ三品共ニ柄鞘ノアル形ニア
 ラス疑ラクハ上古ノ劔ト云モノハ異國ノ産ニテ鞘モ柄モナク彼穴へ緒ヲ引
 入レテ鞭ヲサケルヤウニ拳ニカケテ居タルト思ハル劔ノ制モ精クナリ柄鞘モ出
 来テ後ハ腕貫ノ緒ノ入用ナシ夫ニ古實ナリトテ儀仗兵杖ノ太カノ首ニ今モ
 露草トテ紐ヲ下ルモ毛抜形トテ穴ノ有目共其臺ヲスウルモ上古ノ形ヲ遺シタル
 モノナルヘシ云云

洗了の沢あり志村氏山田を流して古流を流すといふ

正三後 菅原長親郷

ちかき羊皮堀を流して志村氏の足跡を

古とよむとて足る万葉うらりぬは代に思ふや 加茂 孝子 鷹

奥州白河城代 片倉景貞

鏡石

本洗馬の芦の甲と云所は流るあり其厚の岨ありて大きき七八間を切つ石質堅
 麓小色青く是より面の方平なり漆むのこころ真玉光新入新
 うはくし流のこと

牛伏

内田の金峰山牛伏寺ハ俗ハうらぎと云 蘇小唐版の般若經あり往古百二
 十九卷あり 一回禱小燒亡 今僅小焼ぬる昔是赤の牛伏經を獻し

ありて御行々々教百此漁難四蹄をりて行ん筋力已不越して終不死せ
りて今持り小堂一字を建て中に息子の牛両匹を刻て置牛尊と云ふ

金堂ハ厄除觀音と主人尊信也 地藏菩薩腹内書云 至徳二丁丑五月四日

釋迦堂本尊長四尺腹内 中興修理應永三三年 大威徳明王長三尺 牛二乘牛 一尺五寸 腹内

應永廿八年修理 波多願大和守清勝 石五輪 永享廿九月日

大檀那清照 長六尺一丁一丁近年改造了 俗傳小此田姓古

什物ハ泉の小太郎太刀と云有 又古き兜の跡澄の印あり 水一丁一丁湖ありと云泉の小太郎と云者屏に垂て三清池と云下の

岩を突破り又水内の傍りの岩をも破りて水を千曲川へ流し

て平地とす然るゆゑと云山家與り船付といふ所ありを築

し石と云今あり松本を古く深瀬といひもかゝ故と云

天文軍記深志二作

梅ノ水を治めハ太古のより一又泉の小太郎と泉の小次郎親衛とを誤て

云々親衛ハ經基王の五男下野守備快茂の孫林源也云杖原泉小次郎公衛の子也

多力絶倫と云常ニ大船七幅の帆を掛るをて試み是を揚げ推却教回も世人舟を

盪の夏再び我邦と出と云建曆年中北条茂時頼家を廢し實朝を立るとも

悟て頼家の子を奉りて美兵を起さんをも漢を相應る者許多和田茂盛子姪と

亦密に誓言納を饋ふ未だ發せんしてゐるも志を遂げて敗る親衛を

之とて姓所を知りすと云松本の東南小泉村あり此地の産也貝多氏りハ

頼朝御泉の親衛ノ命して屏にをりて屏に垂らる所と云屏に決と云

西あり是より下を屏のと云然れとも屏のよりハつとびつらるるべ

重王松 埴原村金峰山保福寺 庭古松あり寛政二年冷泉為恭卿銘して重王と云

高二間半 身樹大八尺四寸 幹枝共七本 北正面枝三間
 東枝五間二尺 西枝五間四尺 南枝十間 玉敷五十余

正位前權大納言

為泰卿

教子第々々

かたわてききまら

法よりいりも

あつみくくけ

從三位權中納言

為章卿

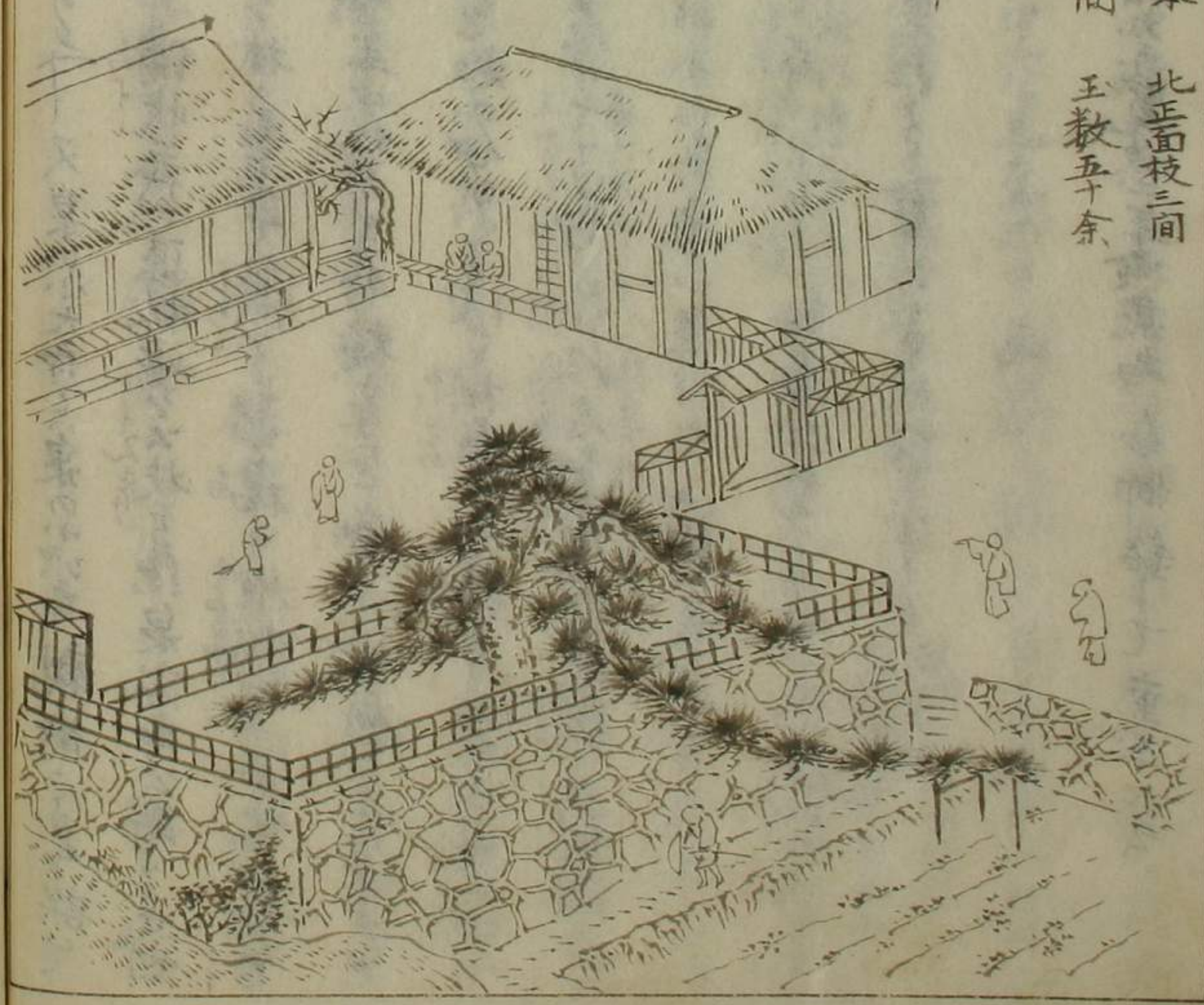
第千世をわさめ

えんこの

わけもろみ

松とくせせ

さうん



筑摩御湯

松本より宮卯の方す四六町より山へと云里子温泉あり和名妙山家とあり 世末年倍

日本記天武天皇白鳳十四年東間の温泉の所幸ありと行宮を造り煙が御足跡

高田の首新家荒田尾の連赤麻呂宮より修治を造り是より湯を造り

夫木 涌る事りえともさうり人つるものいふ富士のりむりり 殷富門院

修理吉史唯三あるのちちを修りともさうり人つるものいふ富士のりむりり

後拾遺 湧る湯のりくふかつる白糸はく人をもえぬ物をもりりり 湯重之

け奇より白糸の湯ともさうり ~~湯~~ 湯重之

湯よりあかにもうた人のあたる葉の湯ありさうり人のもあまをわ

午ぬ時ふ銀香湯あり修ふへとさうり人をもえぬ物をもりりり

二十とりの田のひけさきい ~~湯~~ 湯重之

こゝろ多し人住ぬるもあまほ法師のまうしてせし人どものゆゑ
らひて侍あまんと侍をすてはしめしものことあまねらひ
せしあまのまうするものゆゑとてあまのまうするものゆゑ
とらふ

蛭蛇骨

清田の温泉の東北に御射山といふ山ありけ山の深は石多くあまうて一
尺二尺の岩穴ありてあり穴の穴大蛇のまむし蛇のまむし一は北を山を
ふりて南も山を回る間あり其寒きとも暖き地勢ありてあまうて大
蛇をこるる層なりといふさて天明の改よりいふ山射山のたぐはぬ地
の死するありとて蛇骨の人にも清田山より人多く見ふ行々を蛭
蛇の骨といふ死して骨のまむし蛇の骨を原村といふ所にてあまうて

とのあり其形をさるる筈の如く中骨ありは骨尖骨あり骨互ふ
とちちひをすは骨通り又尖骨の先や骨通りは骨は骨通りてあり
まむしといふと層なりたれすあまうて骨の骨一寸三分もありそれを
いふ考れぬ地にあまうて大蛇徑一尺もあまうてといふ

猿午狸

文化元年の秋八月山辺上金井といふ里あり一民栗畑へ行に怪しき異獣畑の
中をわたりよりり虎犬をわれりてとせんといふれと極きけとあまうてとらふ
りつらりりれはまむしの捕物をたの連はくは地をまむしをたぐはくは地を
てもたを極きけありまむしといふ極きけとあまうてとらふとらふとらふ
其形は狸の如くりて少したの狸より大より毛も長く黒もつよし
口のきれぬ狸よりほく歯も狸より長く肩狸より白もつよし又狸と遠くは

四足今く猿の如し躑あり本へもよまくるも然れも本への身しりしりなり
しとまりけ異獸名をもちし故に松本に採りて米園に尋しに
是ハ猿子狸とよみのありて 猿子狸のふ蘭山の 或は松本本草の風狸と云る
流もあつと云り

北塞嶺傳ふ至は長條を引て云明成化中京師有物如狸或如犬
條然トノ如風或傷人面啣手足一夜數十獲俗名黑青

花菘蓉

文化十二年三月所射山のねく一米園採藥する伴に行しに日ありよき山足
の沙地一異草あり葦に似て花あり草に似て葉あり只一本互を色ハ
淡紫より光沢あり大さ一寸許り鱗甲ありと松葉に似たり又菱枯草
の花の如し長きに穿 長き二尺 鱗甲の間毎に花あり菱枯草の花の如し
根ハ塊をなして根根をし是ハ本草に所謂花菘蓉と云ふ物を肉菘
蓉の類と云ふけ抽日光山に稀なりと云ふ

沢村の異鳥

桐系村に屬して沢村といふ所ありそ村の農夫文化三年八月十八日稻田
中一異鳥をとりたりを多つて弱りて動けざるやに捕りて
ありそ鳥の大き白頭より少し大なり 鶴鳴苗代鳴鳥の羽比と
し羽を開け口のまかけもあり徑二尺許り翅身のま純黒なり少し
赤色を帯り川鳥の色の如し尾ハ短く中尾長く先端ハ短くたぬハ
りかちる足ハ赤黒色を指の間ハ膜を膜の形ハ略すこの足のまの如し
嘴ハ長く下少し先を曲り鼻の穴より瘤の如し目の色赤色光小なり
まての形ハ燕の如し水多し水に入れし遊草藪の中より

は鳥漢名も和名も未詳水史鳥鳴なるの類の異多ありと米関ソリ
或人の説は多異国の海を渡るを以年け以大風吹く大風を異國
とて呼んで以地へ来りしうんさるを不餌も食べしか弱りたるうんと
いふ事ありぬし

掌蓮 たまいご

稲倉村は射山山入の山に葉花すき花さき実のあつはゆり春より若葉
ゆく五月より六月までの間小花を葉のすき実のあつはゆり花の色も
青あり花は四五花ありつゝ五瓣あり一分も不盈花謝して実を結ぶ
実の色は青く葉の色は如し後より紫色も熟するは大ききもの
八九尺あるもの五六尺葉の形は朴檜の如し諸國に菩薩樹といひて葉
のさびふ実あるもの何れもいふとけ木のよみさるる書ありけは

名を方言ふ花いづこも実さきまよりけは米関尋ふこれハ予ハ師
由春翁長崎へ齋し今人の清人ふ名を問ふ彼云そハ掌蓮といふとそん
義が原の石

義が原山家のたぐりて北入村の辺大が鼻といふ山の絶頂より山の前
袴腰より山ありて後山よりけ山の東ハ小縣郡西ハ筑摩郡ありけは
以て分界とすそ山ハ平ら原の南北ハ長く西へ曲りて一里半あり西ハ筑
摩安曇二郡を重き北ハ埴科高井水内東ハ小縣佐久二郡とす不二津
綿と連りてえゆ南ハ諏訪を重き湖水眼下ありさそけ山の峯より
半そそ寒氣つよく常々霧深く寒風烈くして草木育ちかここ
つる原の内ハ道一ハ助ありてそ邊白竹藪のそ木ハ寒風は枯折ると
去月せんそ風帯の勢ふ感くそ岩壁みる新て大らつハ六七間小らつハ尺ふ

盈尺^{こぶせ}を板の如く^{いそ}薄く^{うす}平く^{ひら}して人作^{ひと}の行^なあり如し^{ごと} 巨大^{こゝろ}の岩^いを撿^いり

んれい五六枚^い或は百枚^い累^{かさ}りて^あ恰も^あ板^いを撿^いる^{ごと}如し^{ごと} 岩^いを一枚^いつとせ

厚^あきよ五六分^い落^おき^おの^い三分^い盈^こぶ^せ 山^や辺^べの^い土^い人^いを^いと^り来^きて^あ土^い籠^いの^いを^い根^い

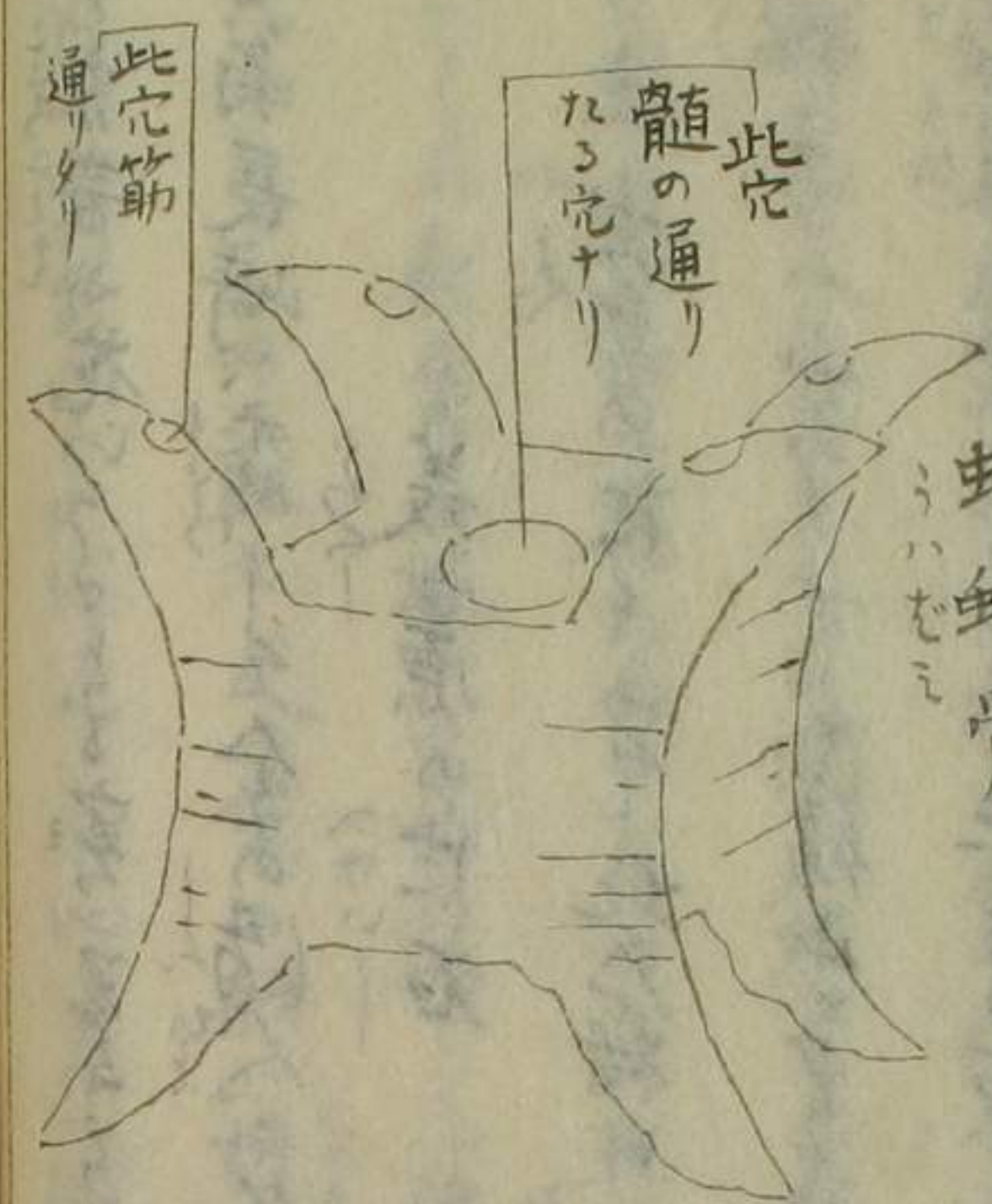
を^い昔^い月^い永^い年^い不^い朽^いして^あ瓦^いと^い勝^いれ^りを^い行^い石^いの^い肌^いの^い尋^い常^いの^い如^いく^い色^いハ^い淡^い青^いく^いを

白^いの^い班^い文^いあり^い至^いて^あ堅^いき^い石^い之^い平^い直^いを^い曲^いり^い多^いく^い落^いく^いへ^いき^い目^い入^いる^い奇^いなり

此^い節^い通^いり

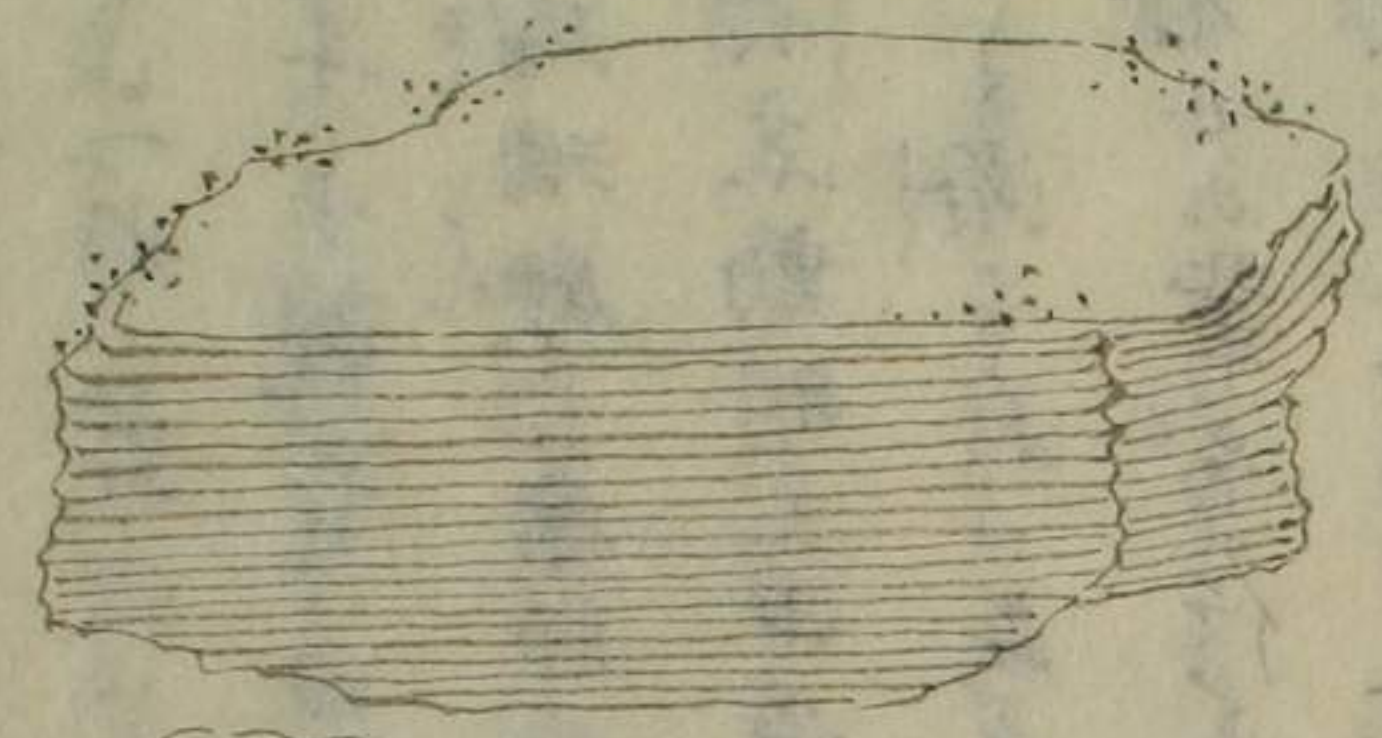
花^い蓴^い茗^い

此^い所^い根^い之^い色^い白^い茶^い色^い



如此^い鱗^い甲^いあり^いて^あ花^い之^いつ^いつ^いあり^い 然^いれ^いば^い葉^いは^い長^いく^いあ^いる^いなり

片^い石^い重^い累^いの^い図^い



沢^い村^いの^い異^い鳥^い



掌^い蓮^い

花^いの^い図^い



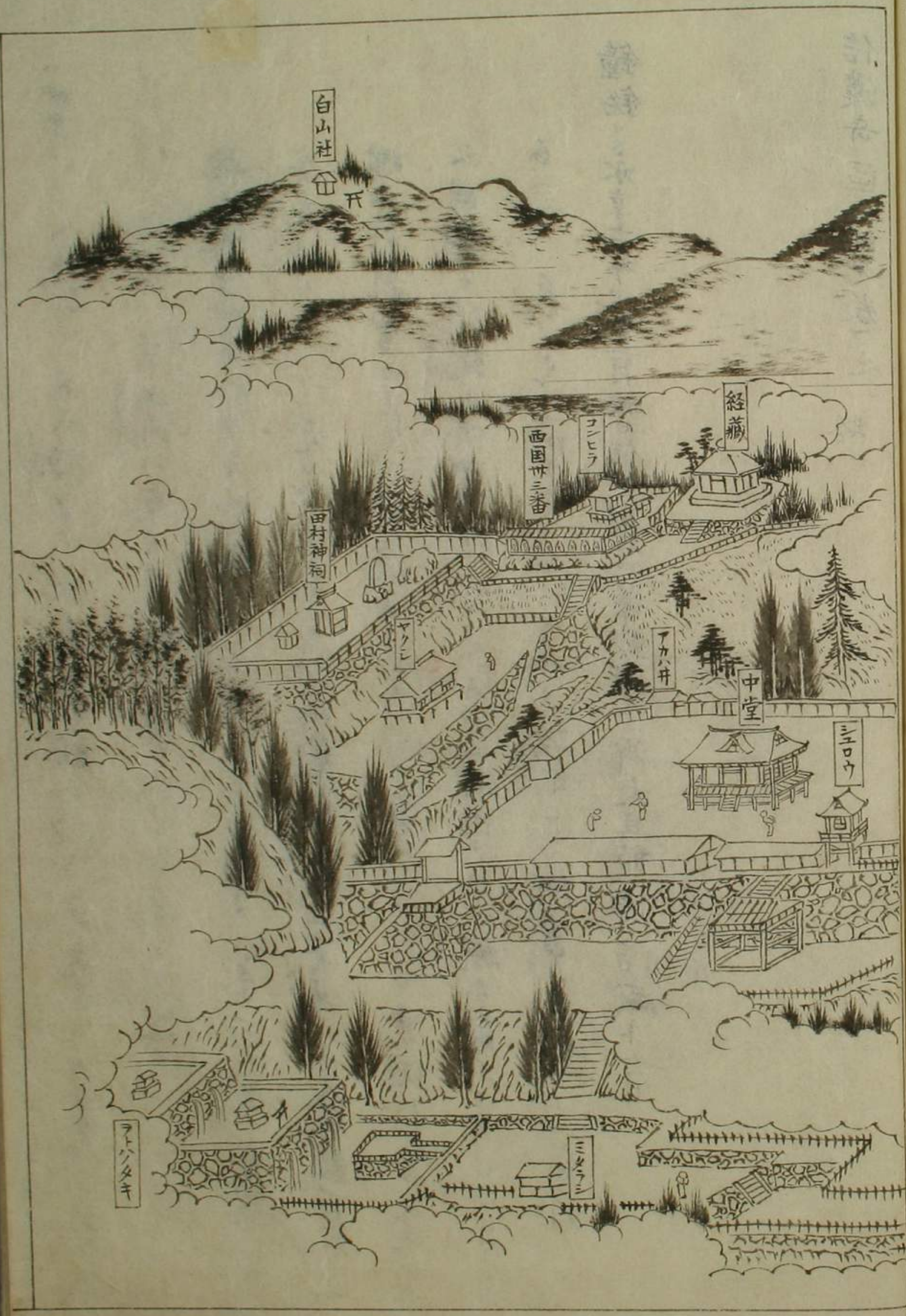
實^いの^い図^い

朱^い関^い寫^い

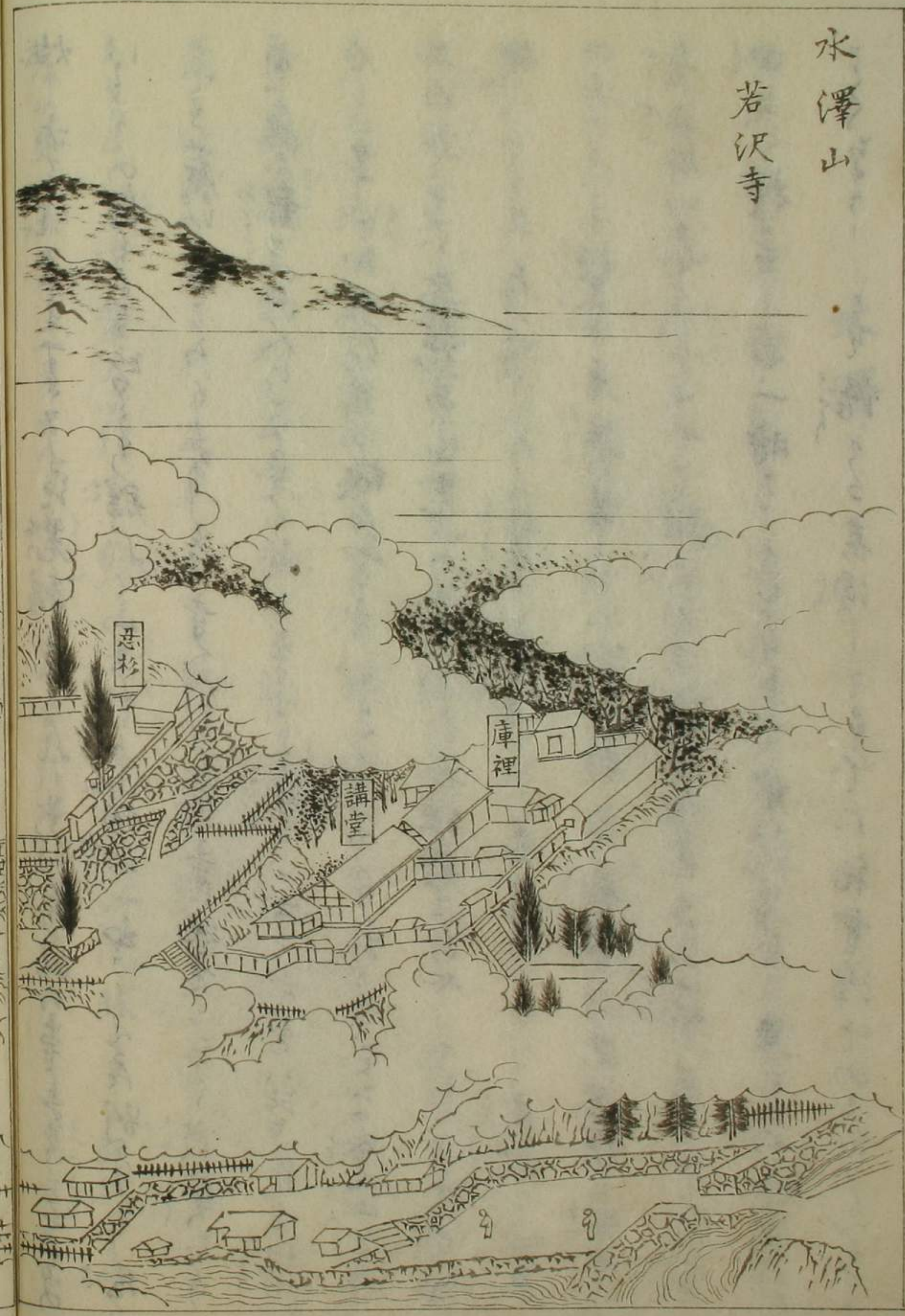
水澤

水沢、松本より西へありて道の程三里程強く、及び此物あり上流田村あり
十八丁谷の流、此山大同年中田村將軍中興の建立と云古ハ三
十余丁山上にあり長祿二年今の地へ移して慈眼山若沢寺と号し又
水沢山ともいれ、若沢ハ名の草字に誤りて一點をくまふと云中堂
救世殿の千手観音ハ田村丸の甲の鉢の守本尊なりと云其地の人謂仰
光金堂瑠璃殿ハ藥師如來其上の頭ハ田村の神祠ありて中へ束帶の像
あり講堂ハ不動明王中堂の側あり杉を慈松と云雄鳥羽の滝ハ三段ハ
落るは激々浴もれハ色黒ふものハ純白とあり醜きものも容白麗く
あるとして児女の輩も往きも縋て老松鬱鬱とて凡致さきと云然り
茲ハ文化六年十月廿八日霄暗のらきた水澤の方ありて光天を

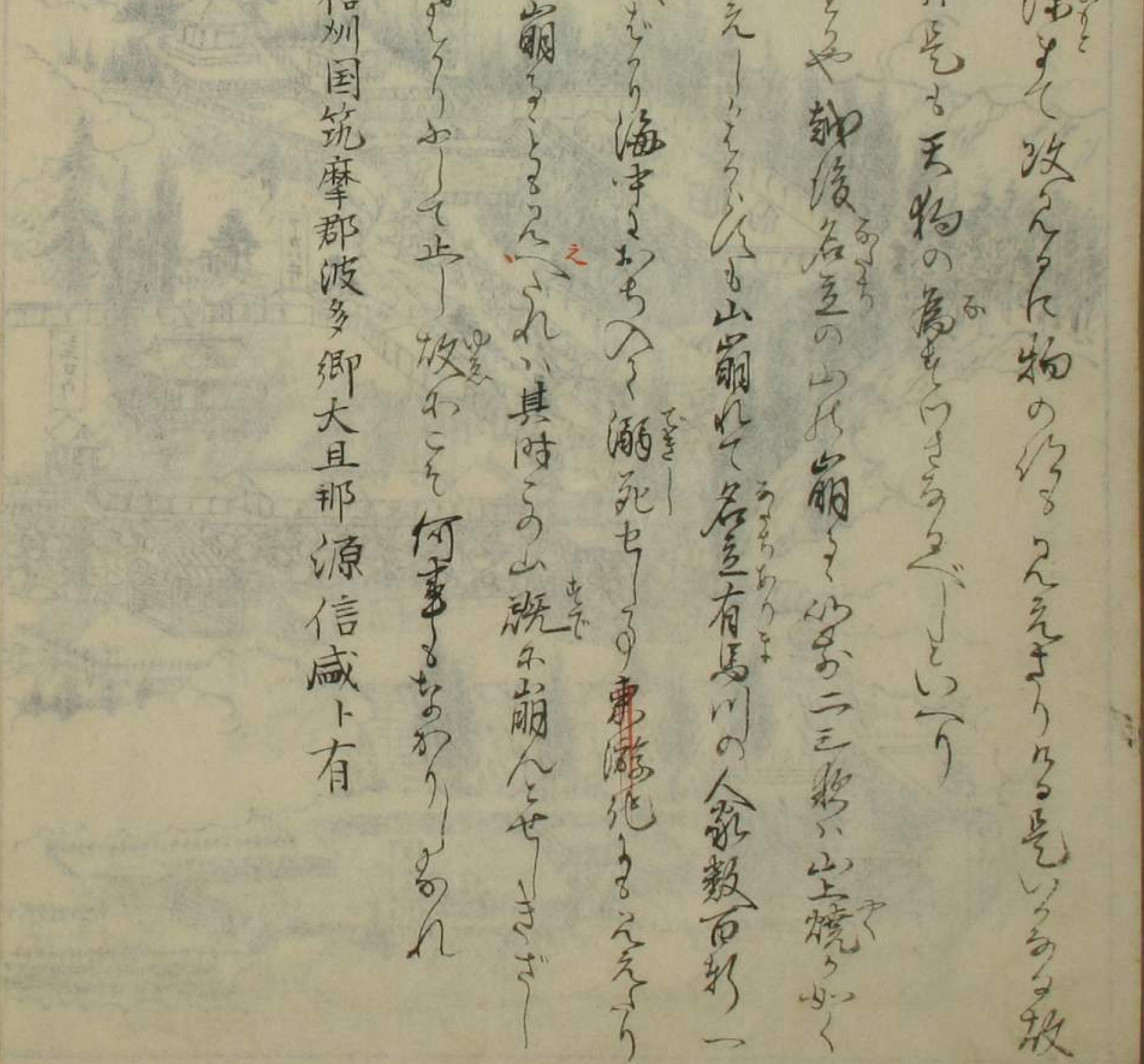
灼く赤燿くもすまき、此光氣ありりれハ是ハ水沢の常と云りてその
はらりの村より皆もろ解れて山より山嶺よみわたりて、此別所あり物
ありて若法寺と云りて、寺人信んふ寺ハ物音もあく寂莫たり
前庭ハ瓢箪の人のこゝろ、此瓢箪ハ中も遊ぶと云く、此瓢箪ハ此
人々ありて、此瓢箪ハ故也と云ハ、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、
されとも、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、
網り、又水沢の、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、
のあり、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、
音止ぬ、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、
由り、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、
正しくあり、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、此瓢箪ハ、



水澤山
若沢寺



信濃奇區一覽卷之一終



一里をりも山流くらの津よて改んた物のゆゑんえきりたる是いつる故
よりわのを知りす土人の是も天物の為をいさるるべしといひ

梅は延享四年の事とや御後名豆の山崩れ山崩れ二三粒の土焼く如く
奈光赫々として見えしころは山崩れて名豆有馬川の人数数百人
時おられ田舎の人むら海守におち入る溺死せしもの事絶えぬえり
又国語に川竭山必崩れとあるは其時この山崩れ崩れとせしきざり
あつた一箇を一時とせしやして止放れこそ何事もなかりしとあれ

鐘銘に永享五年己未三月晦日信州国筑摩郡波多御大且那源信咸ト有

可成
信濃奇區一覽

石の庄

〇〇〇

四ノ巻

信州

信濃奇區

石名えきの所を往る御河
武蔵府中におちりし御河
石名えきの所を往る御河

イナ

大種

信濃奇區一覽

内建

信濃奇區一覽
信州
信濃奇區

一里の山流くらの源より改んた物のゆゑんえきりたる是いつの故

Handwritten text in red ink on a separate piece of paper, possibly a list or notes, including the word "No. 1" and "No. 2".

山崩れて名は有馬川の人数数百の一
ちんく瀕死するの東海地よるえきり
され其時この山崩不崩んとせしきざ
一故おこも何事もあかりしあれ
波多御大且那源信咸ト有



東のノコナキノ尾
三原山 威後折 水加中在

日本キ
持統帝五年八月遣
社奉行 国領 波多
御高
御高
御高

波多御大且那源信咸ト有
御高
御高
御高

一里... 山... の... 改... 物... 是... 故

Faint handwritten text in a foreign script, possibly Latin or Italian, on a separate piece of paper pasted onto the page.

波多御大且那源信咸ト有
... 山崩れて... 溺死... 其時... 故... 何... あり

二月奉膳棒
御成
日本キ
持統帝五年八月遣
使者... 須波水内
等伸...

御成
日本キ
持統帝五年八月遣
使者... 須波水内
等伸...

東の... 威後... 水...

... 山崩... 溺死... 其時... 故... 何... あり

山崩記 源氏物語
山崩記 源氏物語

山崩記 源氏物語
山崩記 源氏物語

山崩記 源氏物語
山崩記 源氏物語

山崩記 源氏物語
山崩記 源氏物語

山崩記 源氏物語
山崩記 源氏物語

山崩記 源氏物語
山崩記 源氏物語

波多御大且那源信咸ト有

山崩れ 源氏物語
山崩れ 源氏物語

山崩れ 源氏物語
山崩れ 源氏物語
山崩れ 源氏物語
山崩れ 源氏物語
山崩れ 源氏物語

山崩れ 源氏物語
山崩れ 源氏物語
山崩れ 源氏物語
山崩れ 源氏物語
山崩れ 源氏物語

山崩れ 源氏物語
山崩れ 源氏物語
山崩れ 源氏物語
山崩れ 源氏物語
山崩れ 源氏物語

山崩れ 源氏物語
山崩れ 源氏物語
山崩れ 源氏物語
山崩れ 源氏物語
山崩れ 源氏物語

山崩れ 源氏物語
山崩れ 源氏物語
山崩れ 源氏物語
山崩れ 源氏物語
山崩れ 源氏物語

波多御大且那源信咸ト有

